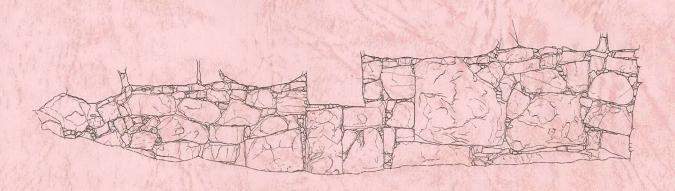
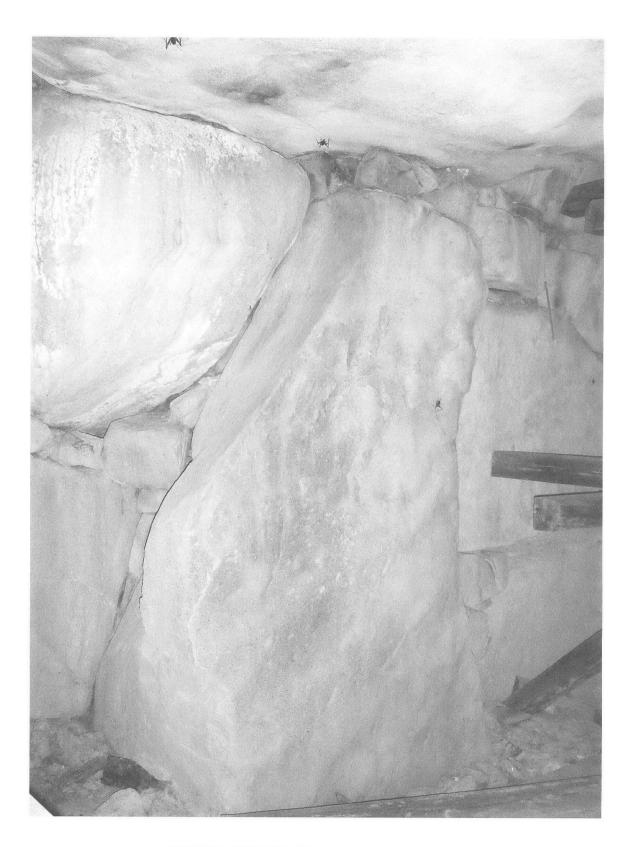
香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳 保存・活用検討委員会報告書(別冊)

2010.3



平塚古墳石室実測図 (右側壁)

観音寺市教育委員会



平塚古墳左側壁玄門部(画面左が玄室)



角塚古墳の墳丘



角塚古墳石室内部

例 言

- 1. 本書は、平成18年12月から平成21年3月までに開催された香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会の報告書(別冊)であり、各検討委員からの保存・活用に関する提言等をまとめたものである。
- 2. 本報告書では、香川県指定史跡「椀貸塚、角塚及び平塚」古墳を対象とした。
- 3. 本書の執筆は、以下の検討委員が行った。(敬称略)
 - •守谷 貞和 検討委員会会長:観音寺市文化財保護審議会会長
 - · 丹羽 佑一 検討委員会副会長: 香川大学経済学部教授(考古学)
 - ・高瀬 要一 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所文化遺産部長(遺跡整備)(平成20年3月現在)
 - · 大久保徹也 徳島文理大学文学部文化財学科教授(考古学)
 - ・菱田 哲郎 京都府立大学文学部歴史学科准教授(考古学)
 - · 横山 照美 観音寺市文化財保護協会会長(平成20年3月現在)

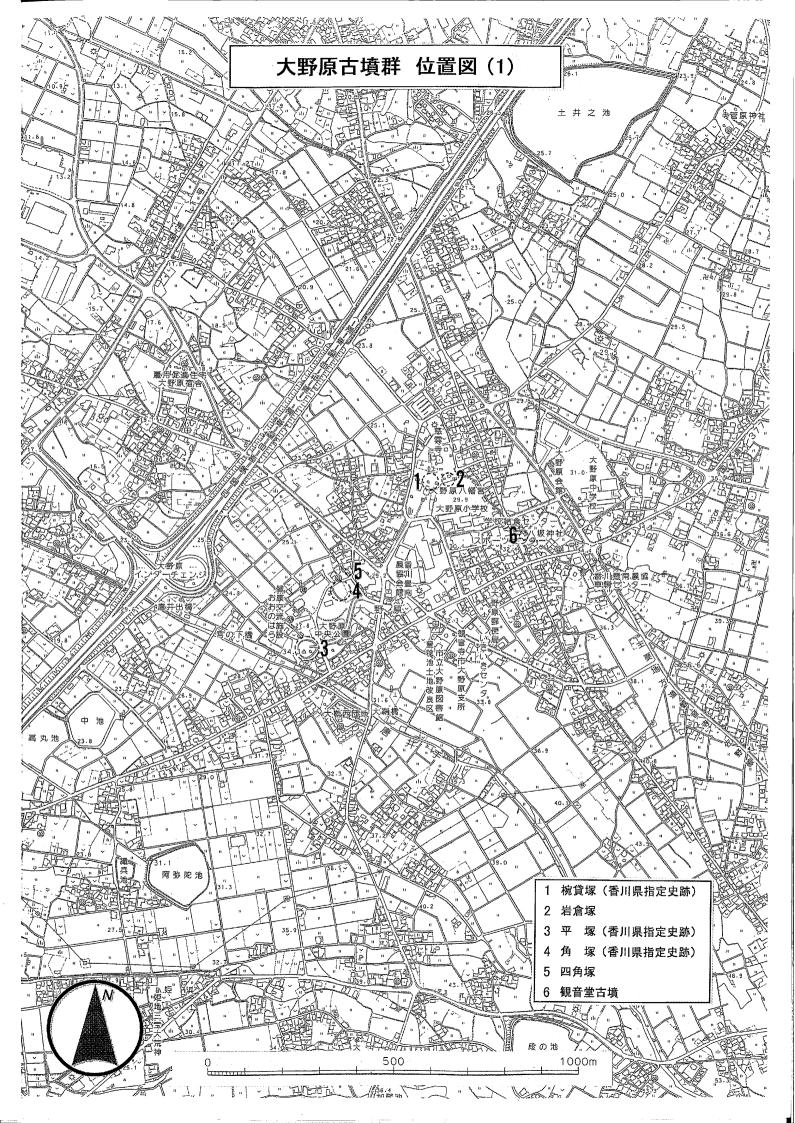
編集は、観音寺市教育部生涯学習課 文化振興係長 久保田昇三が担当した。

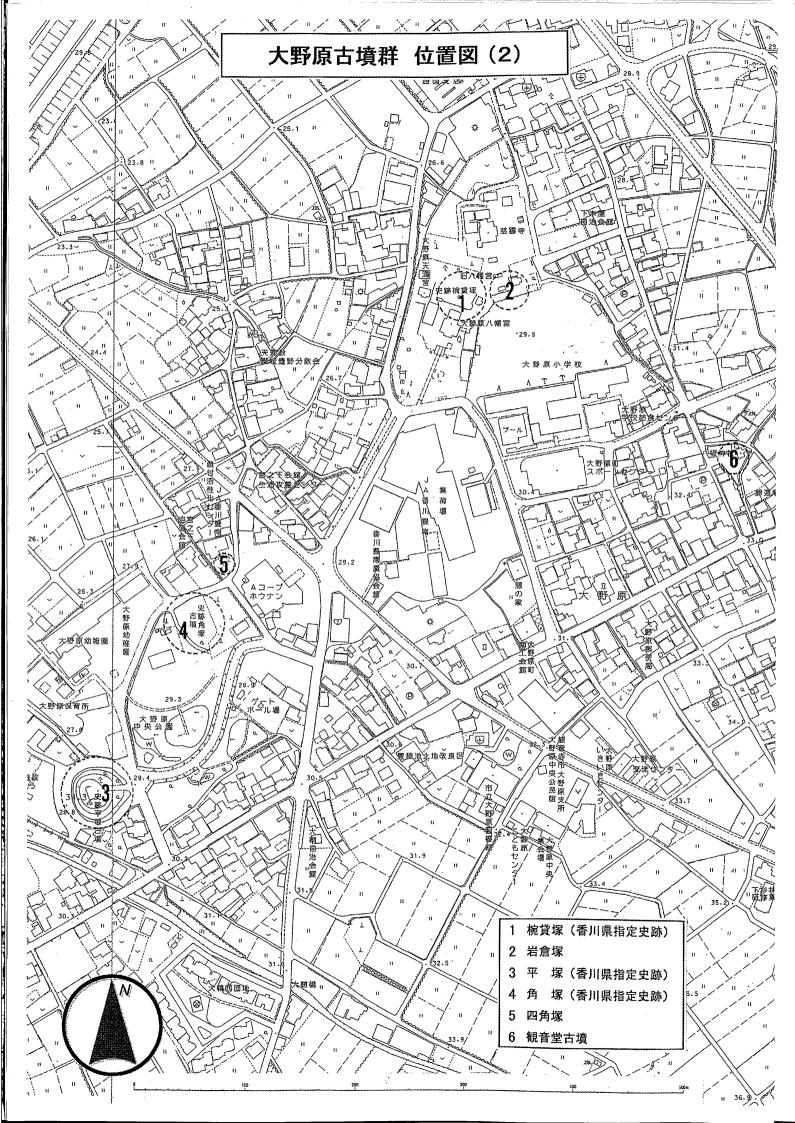
- 4. 挿図の一部に、「観音寺市都市計画図 2 (1/10,000)」、「観音寺市都市計画図 1 7・18 (1/2,500)」を使用した。図の方位はすべて磁針方位で示した。また、図の縮尺はすべてスケールで表示した。
- 5. 本報告書の作成及び基礎調査の実施にあたっては、検討委員会委員の大野原八幡神社 宮司 柘植宗尚氏をはじめ神社関係の皆様に格別のご理解ご協力を頂いた。記して謝意を 表する。

目 次

巻頭グラビア・例言・目次

○ 大野原古墳群 位置図(1)1:10,000						
○ 大野原古墳群 位置図(2)1:2,500						
● 古墳時代の讃岐地方における観音寺市椀貸塚古墳の類型化	(型式)	にみ	る諸	関係)	•	
	丹	羽	佑	_	•••••	1
◆ 大野原台地に所在する大型横穴式石室墳-椀貸塚古墳・岩倉塚古墳・平塚古墳・角塚古墳 - の意義						
	大久	入保	徹	也		8
◆ 大野原古墳群の特色とその意義 ~後期古墳の中での位置	づけか	ら~				
	菱	田	哲	郎	•••••	13
● 観音寺市の文化財保護行政と大野原古墳群の現状と課題						
	守	谷	貞	和	•••••	17
● 大野原古墳群の公開・活用方法について					į	
	横	Щ	照	美	•••••	18
● 大野原古墳群の整備						
	高	瀬	要		•••••	19
○ 報告書抄録 ····································				•••••		. 27





古墳時代の讃岐地方における観音寺市椀貸塚古墳の類型化 (形式にみる諸関係)

丹羽 佑一

1 讃岐地方の横穴式石室の諸形式

横穴式石室を石室平面1(玄門部平面)、石室平面2(玄室平面)、石室側面1(玄門部側面)、石室側面2(玄室側面)に区分し、それぞれの形を香川県下の横穴式石室において類型化すると、以下の形式を抽出することができる。なお石室側面の類型化に羨道側面を加えなかったのは、多くの石室において、羨道部が損壊状態にあるからである。

① 石室平面形式1-玄門部の平面形式

県下の横穴式石室の玄門部の平面形は、I 両袖形、II 片袖形、II無袖形に大別され、I 両袖形は、玄門袖石と羨道側壁の面を合わせる(a 羽子板形)、玄室側壁と羨道側壁が一体となり、玄門袖石が両側面より突出する(b 突出形)、突出形に近いが、玄室側壁と羨道側壁が一体で無いことから玄門袖石の羨道側面からの突出度が弱く、aとbの中間に位置する(c 中間形)に3細分される。 II 片袖形は、a 左片袖形、b 右片袖形に2細分される。以上は次のように表記されるが、I 両袖形の()内の数値は羨道幅の玄室入口幅の割合であり、形式の数値化を検討したものである。

Ⅰ 両袖形(数値:羨道幅÷玄室入り口幅)

a:羽子板形(89.3%~28.2%)

b:突出形(110%~80%)

c:中間形(東讃岐の簑神 86.9 椋の木 87.2 を除くと、79.5%~70.2%)

Ⅱ 片袖形

a:左

b:右

Ⅲ 無袖形

② 石室平面形式2-玄室の平面形式

県下の横穴式石室の玄室の平面形は、a 長方形、b 長台形、c 胴張り形、d 逆長台形、e 撞木形、f 逆 L 字形に大別される。また、c 胴張り形は、c 1 胴張り形、c 2 準胴張り形、c 3 準長台形に 3 細別される。c 1、c 2 には,玄室入り口部の壁石の構築上の処理によって結果的にこの平面形がもたらされたものもある(椋の木古墳等)。以下の表記における c 2 の () 内数値は羨道幅の玄室入り口幅の割合であり、c 2 の細分検討のための参考数値である。

a:長方形

b:長台形

c 1:胴張り形

c 2:準胴張り形(70%台-中尾・久本・新宮・椀貸塚(玄門平面形式 I c)、 80%台-椋の木(玄門平面形式 I c)・穴薬師(玄門平面形式 I b)、60%台-黒島林6号(玄門平面形式 I a)

c 3: 準長台形 d : 逆長台形 e : 撞木形 f :逆L字形

g :方形

③ 玄室側面形 1 (玄門部側面)

玄室の側面形は、玄門上部と天井石、奥壁の据え方によって決定される。県下の横穴式石室の玄室の側面形は、A 袖石に天井石をのせる B 袖石上に梁石を懸け、その上に天井石をのせる に 2 大別され、A はさらに、A 1 袖石上に天井石を垂直にのせる A 2 袖石上に羨道側壁石がのる に 2 細分される。B も、B 1 梁石を垂直にのせる、上下 2 重以上になる場合もある B 2 梁石上の天井石が玄室内にせり出す B 3 梁石上の天井石が斜めに懸けられる、この場合天井石は玄室前壁を充填する風である B 4 梁石に小型天井石を斜めに懸け、玄室前壁を傾斜させる に 5 細分される。以下の表記における()内に玄門平面形式の傾向を記す。

Α

A1(Ib突出形が多い)

A2(Ia羽子板形が多い)

В

B 1

B2 (Ic中間形が多い)

B 3

B 4

B 5

④ 玄室側面形 2 (玄室側面)

玄室の側面形は、玄門上部と天井石、奥壁の据え方によって決定される。県下の横穴式石室の玄室の側面形は、a 天井石を水平に懸ける b 天井石を中央部が最高で前後に斜めに懸ける(寄せ棟形) c 奥壁が最高になるように斜めに懸ける(片流れ形)d 奥壁にまたがる天井石を斜めに懸ける に 4 細分される。

2 観音寺市椀貸塚古墳の形式分類と様式

讃岐地方の横穴式石室の諸形式によって椀貸塚古墳を分類する。

① 石室平面形式1(玄門部の平面形式)

I c (中間形) に属する。「中間形」は、さぬき市簑神・中尾・北谷、高松市東部潮満・ 久本、坂出市・新宮、観音寺市・鑵子塚の石室に採用されている。これらの古墳は各地の 後期横穴式石室古墳群の草分けであり、石室の規模は最大を誇る。この玄門部の平面形式 は、椀貸塚古墳が三豊地方の首長墓であったことを示している。また、椀貸塚古墳の玄室 長 6,7m は、三豊地方だけでなく讃岐地方で最大である。

羨道幅の玄室入り口幅の割合 (羨道幅 ÷ 玄室入り口幅) は 79.5%である。「中間形」の各石室は簑神古墳の 86.9% 椋の木古墳の 87.2%を除くと 70%台に収まる。簑神古墳は未調査である。

② 石室平面形式2(玄室の平面形式)

c 2 (準胴張り形) に属する。「準胴張り形」は、さぬき市中尾、高松市東部久本、坂 出市穴薬師・新宮の石室に採用されている。玄門部の平面形式「中間形」の横穴式石室墳

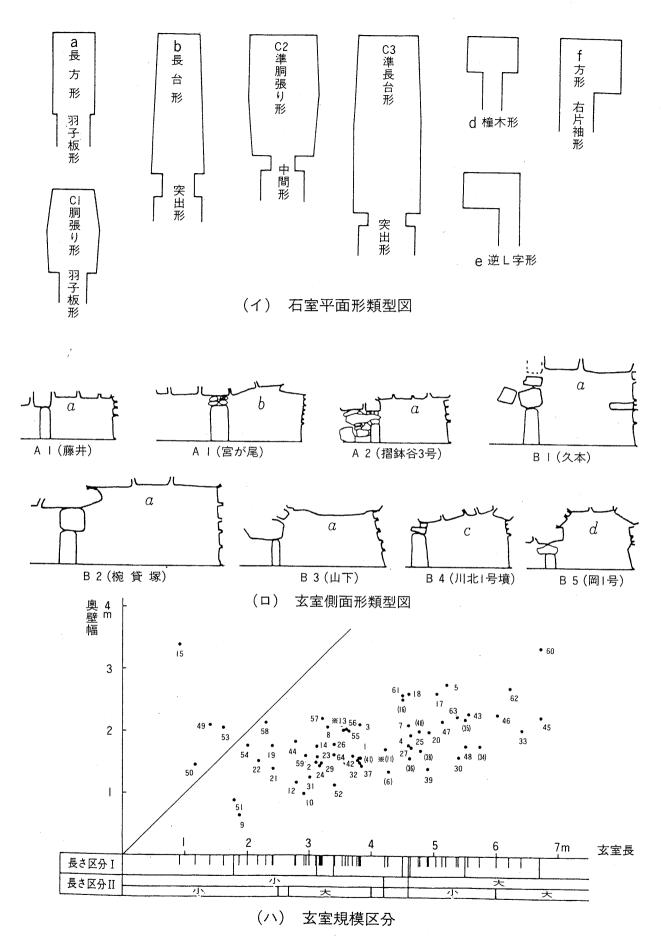


図 1 香川県横穴式石室集成(() は未調査) (『椋の木古墳 大石北谷古墳 調査報告書』1989年 長尾町教育委員会より)

であったことを示しているようにみえる。ところが三豊地方では、観音寺市・母神山古墳 をさらに絞った構成になっている。この玄室の平面形式も椀貸塚古墳が三豊地方の首長墓 群・大森塚古墳群・宗像古墳群・西の後1号墳・縁塚古墳群・平岡古墳群にも認められる。 そこには椀貸塚規模の石室をもつものはない。この玄室の平面形式は、三豊地方では首長 墓に限らず、下位クラスの石室に採用されたことが知られる。

- ③ 石室側面形式1-玄門部側面 B 2 に属する。
- ④ 石室側面形式2-玄室側面 aに属する。
- ⑤ 石室側面形式1 (玄門部側面)+石室側面形式2 (玄室側面)

B2-aに属する、この形式は、高松市西部・古宮権現大塚、坂出市・穴薬師・新宮の 石室に採用されている。これらの古墳は石室平面形式でも椀貸塚古墳と同一形式を採用す る地方首長墓である。

⑥ 椀貸塚首長墓様式

椀貸塚古墳の石室諸形式の組み合わせは、以下のようになる。 石室平面形式1 (Icー中間形)+石室平面形式2 (c2ー準胴張り形) +石室側面形式1(B2)+石室側面形式2(a)

この組み合わせは坂出市・新宮古墳の石室に認められる。しかも、両墳の羨道には讃岐 地方では珍しい前室を推測させる壁組がある。両墳に共通する諸形式の組み合わせを、「椀 貸塚首長墓様式」とする。このような石室の様式が成立するためには、首長間に緊密な繋 がりが必要である。その繋がりは何によってもたらされたのか。また、様式レベルまでい かなくとも地域首長間に強い繋がりが諸形式の共有によって認められた。これらの繋がり は地域を越え、地域間に展開したものであるが、一方地域内部の繋がりは石室の形式にど の様に示されているのか。また、その繋がりをもたらすものは何か。次に地域内部の繋が りを石室の諸形式に検討する。

3 形式の地域的展開

① 三豊平野

i 首長墓群

石室平面形式1+石室平面形式2 (玄室奥幅/玄室長%)+石室側面形式

鑵子塚 B 1 - aI c - 中間形 c 2 - 準胴張り(50.0) B 2 - a椀貸塚 平塚 Ib-突出形 c 3 - 準長台形(43.9) A 1 - a角塚 Ib-突出形 a -長方形(57.8) A 1 - a

ii 母神山古墳群

千尋神社支群 I a - 羽子板形? d - 逆長台形

Ⅲ 一無袖形? d 一逆長台形

黒島林群支群

1号 Ib-突出形? c1-胴張り形(3.8m 玄室長)

6号 I a - 羽子板 c 2 - 準胴張り形(55.6)

久米塚 I c - 中間形 c 2 - 準胴張り形 (58.3) (3×1.75m 玄室規模)

久米東塚 I a - 羽子板 c 2 - 長方形胴張り形(21.0)(4.75×1.6m 玄室規模)

上母神支群

瓢箪塚 前方後円墳-王墓山タイプの横穴式石室?

鑵子塚 I c - 中間形 c 1 - 胴張り形 (42.0) B 1 - a

上母神 4 号 Ⅱ d 一逆長台形

iii 大野原古墳群

小森塚古墳支群

1号 Ⅱ

道下1号 Іа-羽子板 с2-準胴張り形 (仕切石 方柱石無し)

宗像古墳支群

宗像古墳 I a - 羽子板 c 2 - 準胴張り形 (方柱石無し?)

西の後古墳支群

/ 1号 Ia-羽子板 c2-準胴張り形 (方柱石有り?)

以上の各古墳群の玄室長は4m~3mである。

縁塚古墳支群

1号 I a - 羽子板 c 2 - 準胴張り形 (58.8) (2×3.4m 玄室規模)

2号 I a - 羽子板 d - 逆長台形 (50)

4号 I b - 突出形 d - 逆長台形 (41) (6.3m 玄室長)

10号 Ia-羽子板 d-逆長台形 (63.3)

1 1 号 I a - 羽子板 d - 逆長台形 (?)

1 2 号 Ⅲ無袖 c 2 - 準胴張り形 (38.5) (1×2.6m 玄室規模)

1 4 号 I a - 羽子板 c 2 - 準胴張り形 (35)

平岡古墳支群

1号 Ib-突出形 c2-準胴張り形(44)(2.2×5m 玄室規模)

3号 c 2 - 準胴張り形

4号 I b-羽子板? d-逆長台形(65)(1.3×2m 玄室規模)

首長墓は、鑵子塚、椀貸塚、平塚、角塚の順で築造されたと推測されている。この変遷観に従えば、玄室平面形式は胴張り形から準胴張り形、そして長台形、長方形と変化する。玄門部平面形式は中間形から突出形へ変化する。石室側面形式はB1-a、B2-a、A1-aと変化する。形式の多くが代毎に異なること、その中で玄門部平面形式は相対的に継承性の強いことが注目される。

下位クラス古墳群の石室諸形式は玄門平面形式と玄室平面形式を合わせた小様式レベルで共通する事が注目される。小様式は羽子板形+準胴張り形、羽子板形+逆長台形の2種である。これに羽子板形が突出形に変わった変形版が僅かにある。玄室規模から下位クラス墓における有力墓である。小クラス2種の差は、隣接してセットで分布する(縁塚古墳群)ところから、構築時期の新旧を表していると考えられる。三豊平野の下位クラスの古墳群は1時期1種の様式にしたがって極めて統一のとれた斉一的な展開を示しているのである。

首長墓群は、6世紀前半から後半にかけて母神山古墳群の一部にいわば盟主的に分布するが、6世紀の第4四半紀に至って、柞田川を渡って大野原の地に進出し、下位クラスの古墳群から独立した空間に営まれるようになる。椀貸塚の規模、角塚の圧倒的な巨石材、玄室部平面形式、平塚の石室平面形式は、首長墓の下位クラスの古墳群に対する隔絶性を示すに十分である。首長墓のこの隔絶性を石室形式の面で保証するのは、他地域の首長墓との地域を越えた形式上での繋がりであり、一方では石室平面形式一逆長台形にみられるような下位クラス墓との同地域での断絶である。しかし、下位クラスの横穴石室の平面形式のうち準胴張り形は首長墓に共通し、また有力墓は玄門諸形式の突出形を採用している。下位クラスの横穴式石室の諸形式の統一的、斉一的展開は、この首長墓の下位クラス墓に対する隔絶性と通有性を反映したものであり、首長層の権力の特徴に根ざすものである。なお、このような地域における後期古墳群の展開は讃岐では一般的ではあるが、椀貸塚の規模は讃岐で最大であるという首長墓の隔絶性の特徴と、対になるほぼ三豊平野全域を覆う下位クラス古墳群の斉一性の特徴は、他地域の権力に対する三豊地域の首長権力の統括力の卓越性を示すものと思われるのである。

表 1 香川県横穴式石室統計表 (『椋の木古墳 大石北谷古墳 調査報告書』1989 年 長尾町教育委員会 に加筆)

番					1	玄 室 幅							 石室平面		玄室平面形	玄室奥幅	玄室側面形	玄室天井幅	
号	古墳	黄 名	所在地	玄室長	奥	中	口入口	玄室高	玄門幅	玄門高	羨道幅	羨道高	(図8)	玄室入口幅	(図1)	/ 玄室長	(図1)	/ 奥床幅	備考・文献
1	川北	1号	引田町	380cm	155cm	160cm	140cm	230cm	105cm	160cm	125cm	-cm	羽子板形	89.3%	a	40.8%	В4- с	45.20%	川北 1 号墳 1985 年
2	藤	井	白鳥町	310	152	160	162	195	139	147	133	155	"	82.1	"	49.0	A1-a	77.2	「藤井古墳」1984年
3	原間		大内町	382	211	203	199	228	140	130	144	140	左片袖形	72.4	"	55.2	"	63.5	「新編香川叢書 考古篇」 1983 年
4	簀	— 神 —— 尾	寒川町	460	(180)	177	164	(167)	113	143	141	144	中間形	86.9	(a)	(39.1)	"	83.3	奥壁欠く。 未調査
6	中柴	— — 谷	大川町	520 (427)	(135)	(162)	(162)	-	(135)	-	195 (162)	-	突出形	78.9	c2	53.7	-	-	「中尾古墳発掘調査報告」1983年
7	八	 剣	, //	(460)	(213)	(252)	(170)	(108)	(112)	_	-		左片袖形	100.0	c3 a	(31.6)	- B1-d	(70.4)	未調査
8	緑ヶ丘		長尾町	330	206	209	170	-	110	-	112	107	//	65.9	//	62.4	-	-	// 「新編香川叢書 考古篇」1983年
9	陰浦	1号	"	188	67	79	72	-	72	-	64	-	無袖形	(88.9)	"	35.6	-	-	「陰浦 1 号・2 号墳発掘調査報告」1979 年
10	"	2号	"	278	100	104	92	-	71	-	-	-	羽子板形?	-	"	36.0	-	-	"
11	北	谷	"	426	173	215	198	200	105	157	160	180	中間形	75.7	"	40.6	B1-a?	100.0	
12		1号 —	"	282	118	118	125	152	86	-	96		羽子板形	76.8	"	41.8	-	48.9	「前山古墳群調査報告」1981 年
13	惊 ノ	/ 木 	"	353	200	193	168	200	92	143	150		中間形	87.2	c2	56.7	B1-a	68.6	
14	諏訪:		// 	(311)	(176)	(185)	(166)	(192)	(102)	(79)	(95)	-	左片袖形	(57.2)	c1	(56.6)	(B1)-a	-	未調査 袖石は小型石平積み。
15	滝 ——— 潮 満	本 場 塚	高松市 // 3、	(92)	(340)	(272)	(252)	(161)	(124)	-	(96)	-	羽子板形		d	(370)	-	-	桂木形 未調査
17		———— 下	"	(450) 505	(253)	(272) 267	283	(161)	(134) 145	121	160	125	中間形中間形	- 56.5	a //	51.9	B3-a //	67.7	右壁湾曲
18	 久	 本	"	458	258	267	238	333	92	167	167	196	中間形	70.2	c2	56.3	" B1-a	59.3	「高松市山下古墳調査報告」1980 年
19	万	 -塚	香川町	240	180	180	178	-	125	-	120	-	左片袖形	67.4	a	75.0	-	-	「万塚古墳発掘調査報告」1970年
20	峰山	Ц 4	高松市	492	200	246	206	269	118	163	122	_	羽子板形	59.2	c1	40.7	A2-a	-	奥壁欠く。 「高松市石清尾山古墳群緊急調査概報第 2 次」1972 年
21	峰 山	Ц 10	"	243	140	137	140	-	111	-	111	-	左片袖形	79.3	a	57.6	-	64.0	「同位中4月月上山口坝研系之列」「列24 //
22	峰 山	Ц 13	"	218	154	161	148	-	89	_	96	-	羽子板形	64.9	"	70.6	A2	-	11
23	摺鉢名	谷 2	"	313	158	194	175	206	98	150	103	153		58.9	c1	50.5	A2-a	-	「高松市石清尾山古墳群緊急調査概報第1次」1971年
24	11	3	"	317	146	171	159	204	83	148	92	172	"	57.9	1	46.1	"	54.8	n .
25	南山浦		"	465	194	205	182	~	115	-	132	-		72.5	a	41.7	-	-	「南山浦調査報告書」1985 年
26	"	2 4	"	341 465	182 176	179	174 182	_	118	-	129			74.1		53.4	-	-	"
28		— т Ц 1	"	(370)	-	(197)	(195)	(200)	(118)	(130)	(118)	(130)		77.5 (60.5)	"	(53.2)	- (A2)-a	-	### ### ### ### ### ### ### ### #######
29	"	3	"	(320)	(150)	(160)	(150)	(152)	(96)	(49)	(96)	-	右 //	(61.5)	"	(46.9)	- (A2)-a	_	小崎直 1個石は小宝石下側の。 パ
30	平オ	木 1	"	540	160	180	200	231	122	156	181	181	突出形	90.5	b	29.6	A1-a	82.1	「文化高松」第 6 号 1984 年 高松市教委
31	//	2	"	300	128	140	148	156	100	-	138	-	//	93.2	//	42.7	"	67.7	"
32	//	3	"	383	150	160	173	206	106	-	140	-	"	80.9	"	39.2	-	81.4	"
33	古宮権理	現大塚	"	641	203	214	206	324	146	-	158	-	羽子板形	76.7	a	31.7	B2-a	102.5	奥壁上天井欠く。
34	山野		"	(575)	(180)	206)	(201)	(253)	(139)	(174)	(145)	(186)	(羽子板形)	(72.1)	"	(31.3)	A1-a	-	未調査
35	鬼無		//	(575)	(220)	(220)	(210)	(1.1.1)	- (22)	-	- (:)	-	突出形	- :	<i>"</i> ~ .	(40.0)	"	-	<i>n</i>
36	水 栄 木 の !		飯山町	(460)	(158) 146	(133) 169	(158) 180	209	(93) 126	171	(129) 154	-	"	(81.6)	" b	(34.3)	Λ1 2	- 647	『
38	山神		<i>у</i> хшір	(480)	(170)	-	(240)	-	(151)	-	(183)	-	"	85.6 (76.3)	b "	(35.4)	A1-a B3-a	64.7	「新編香川叢書 考古篇」1983 年
39	穴 薬	_	"	490	240	250	225	(261)	116	-	190	168	"	84.4	c2	49.0	B2-a		「新編香川叢書 考古篇」1983年 コンクリート床
40	北山	3 号	"	(478)	. (200)	(192)	(218)	(199)	(140)	(160)	(189)	(171)	//	(86.7)	a	(41.8)	A1-a	-	パ 未調査
41	松	井	"	(384)	(157)	(167)	(193)		(156)	-	(178)	-	"	(92.2)	b	(40.9)	-	-	"
42	中	村	"	371	(159)	(236)	(221)	(216)	(129)	(164)	(158)	-	//	(71.5)	(b)	(42.9)	A1-a	-	コンクリート床 "
43	新	宮	"	555	230	250	216	231	125	150	182	-	中間形	84.3	c2	41.4	B2-a	-	前室 「新編香川叢書 考古篇」1983年
44	真. ————	伏	"	280	185	185	155	-	92	-	92	-	右片袖形	59.4	a	66.1	-	-	「香川県埋蔵文化財調査年報」1979年
45		2号	"	670	225	255	256	280	(172)	195	(208)	-	突出形	(74.3)	c3	33.6	A1-a	-	未調査
46		3号 4号	"	600 520	230	257 238	280 250	266	(172)	(167)	(208)		"	(74.3)	b "	38.3 41.7	"	<u>-</u>	未調査
48		7号	"	550	180	215	210	255	149	194	194	227	"	92.4	// c3	32.7	. "	-	水調宜 //
49	青の山		丸亀市	140	213	223	222	-	-	-	82	-	左片袖形	36.9	e	152.1	-	-	逆 L 字形 「新編香川叢書 考古篇」1983 年
50	//	8号	"	117	147	154	150	-	-	-	73	-	"	48.7	"	125.6	-	-	" 青の山 8・9 号墳発掘調査概報」1984 年
51	宇多津	≢3号	宇多津町	180	90	100	100	-	52	-	76		突出形	76.0	a	50.0	-	-	II .
52	//	5号	"	342	115	134	(155)	-	92	-	142	-	//	(91.6)	b	33.6	-	-	「青の山宇多津 5 号墳調査報告」1983 年
53		5号	綾南町	163	205	192	220	-	-	-	69	-	羽子板形	31.4	d	126.4	-	-	亜橦木形 「新編香川叢書 考古篇」1983 年
54	岡田井		"	200		180		-	-	-	(90)	-	右片袖形	(50.0)	f	90.0	B5-a	-	
55	岡 1 宮 ケ		善通寺市 ,,	366	200	203	200	234	103	128	110	145	羽子板形	55.0	a	54.6	B5-d	42.9	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
56 57	王墓		"	361 320	(220)	(220)	230	225	123	170	167 90	173	"	72.6 40.9	c3 a	56.0 68.8	A1-b	38.6	
58			多度津町	237	216	227	189	254	81	-	81	-	"	42.9	a f	91.1	- B5-a	-	1
59	黒島村		観音寺市	295	164	173	136	-	96	-	90	-	"	66.2	c2	55.6	- D5 u	-	「黒島林第5・6号墳調査報告」1977年
60	椀 貸		大野原町	670	335	368	308	350+20	135	162	245	222	中間形	79.5	"	50.0	B2-a	53.3	前室未調査「新編香川叢書 考古篇」1983年
61	角	塚	"	450	260	250	250	225	170	185	235	180	突出形	94.0	a	57.8	A1-a	78.6	「香川考古」創刊号 1983年
62	平	塚		620	272	291	293	245	180	149	246	221	"	84.0	c3	43.9	"	65.1	未調査 「新編香川叢書 考古篇」1983年
63	_		観音寺市	536	225	250	225	277	127	168	168	190	中間形	74.7	c1	42.0	B1-a	55.6	
64	鬼兵衛	島6号	直島町	340	164	165	161	182	108	-	108	-	右片袖形	67.1	a	48.2	-	-	「新編香川叢書 考古篇」1983年

大野原台地に所在する大形横穴式石室墳 - 椀貸塚古墳・岩倉塚古墳・平塚古墳・角塚古墳 - の意義

大久保徹也

はじめに

ここでは大野原に所在する4基の大形横穴式石室墳-椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳・ 岩倉塚古墳-について、四国諸地域の大形墳と対比しながらその位置づけを考えてみたい。

1. 椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳・岩倉塚古墳の築造時期

まずこれまでに得られている情報から諸墳の年代的位置を確認しておきたい。岩倉塚古墳をのぞく3基については従来から指摘されてきた椀貸塚→平塚→角塚古墳、という時間的前後関係はそのまま首肯できよう。現状では伴出須恵器などから直接築造時期を絞り込むことは困難であるが、いずれも石室構築石材の全般的大型化が一定進行しているので、全体として6世紀後葉以降の産物といえる。最後尾に位置する角塚古墳では玄室奥壁の一枚石化をほぼ達成し、玄室側壁についても同様であることから、一般的に7世紀前半台に下ると見なす事が妥当であろう。したがって上記三墳の築造は6世紀後葉~7世紀前半台の幅でとりあえずは納めることができる。その上で、石室形態から各古墳の築造時期をもう少し絞り込んで検討する。

まず椀貸塚古墳の築造時期を推測する場合、手がかりとなるのは、出土須恵器から6世紀後葉の築造が確定している母神山鑵子塚古墳である。鑵子塚古墳は玄室床面積11.8㎡を測り、讃岐地域では最初期の大形横穴石室といえる内容だ。また奥室(玄室)前方に小規模な前室を付した複室構造や玄門部側面の内方に突出させた立柱構造など周防地域に祖形(山口県黒山3号墳)を見出すことができる点がすでに指摘されている。香川県王墓山古墳・菊塚古墳、愛媛県東宮山古墳・経ヶ岡古墳・いずれも後期半ば、6世紀中葉に位置づけられるだろう。-など、周辺地域で先行する有力墳の横穴式石室構造との差異は大きい。母神山鑵子塚古墳の石室は山口県黒山3号墳をモデルとしてその基本形態を採用しつつとくに玄室の長大化を追求した形態と見られるが、こうした外来的石室形態を新規に導入しながら石室の大形化を図っている点が興味深い。この鑵子塚古墳石室の形態・構造が、大野原の4古墳を含め、以後讃岐地域の大形横穴式石室に踏襲されていくことになる。

さてそうした関係の中でも、椀貸塚古墳の横穴式石室は基本形や石積み構造の点で最も 母神山鑵子塚古墳石室に近似したものである。なお椀貸塚古墳では玄室床面積で約2倍、 同容積では4倍弱に達する。その上で鑵子塚古墳石室に比べ使用石材の大型化傾向や、玄 室前壁部の構成など部分的な構造面の簡略化が観察できるので、これに直続する築造時期 を推測できる。

また出土須恵器から6世紀末葉ないしは7世紀前葉に位置づけられる高松市久本古墳、 坂出市新宮古墳の石室は各々、椀貸塚古墳石室をモデルに、前者では長大化した前室部分 の羨道化と石棚の付設、後者では玄室高の圧縮という形で部分的な改良を加えた形態と評 価することができる。

以上から椀貸塚古墳の築造時期は鑵子塚古墳に直続し、久本古墳・新宮古墳に先行する 段階と絞り込むことができよう。なお椀貸塚古墳に接する岩倉塚古墳は現状では玄門部よ り前面の構造を知り得ないが、残部の形状と規模はほとんど鑵子塚古墳と一致している。 椀貸塚同様、鑵子塚古墳にごく接近した築造時期を想定できる。そして椀貸塚古墳同様に使用石材の大型化傾向を明確に認めうることから、やはり鑵子塚古墳に直続する、すなわち椀貸塚古墳に相前後した時期の築造と推測できる。つまり鑵子塚古墳石室をモデルに、その飛躍的拡張を意図した大形石室(椀貸塚古墳)と鑵子塚サイズを引き継いだ規模の石室(岩倉塚古墳)を併置していることになる。

平塚古墳石室もまた、祖形を鑵子塚古墳のそれに求めることができるものであるが、鑵子塚古墳あるいは椀貸塚古墳の石室形態を改変した度合いが小さくない。したがって椀貸塚古墳・平塚古墳の築造時期には一定の時間的間隙を想定しておくべきである。

玄室下半が埋没しているものの平塚古墳の石室は、椀貸塚古墳に比べ、玄室高を著しく 圧縮していること、玄門天井を構成する大形石材1石で玄室前壁を構成すること、前室が 長大化して羨道と化した点が相違している。こうした点から椀貸塚古墳と平塚古墳の間に は新宮古墳や久本古墳など椀貸塚古墳の改変型石室が位置し、平塚古墳はこれらを介して 間接的に椀貸塚古墳の石室形態を継承する関係にあるとみられる。したがってその築造時 期は6世紀末ないし7世紀前葉より遡ることはないだろう。

その一方で。築造地域を異にするものの、6世紀末葉ないしは7世紀前葉には四国島内でも愛媛県東温市川上神社古墳のように石材大形がいっそう進展して玄室奥・側壁の一石化を達成した石室が登場している。また愛媛県四国中央市向山古墳2号石室も不整形な石材のため間隙を別の小石材で充填するが、奥壁はほぼ一枚石化し、側壁でも玄室高に匹敵するサイズの大形石材を用いている。こうした例から、一定、石材の大型化が進むものの玄室奥壁3段、側壁4段構成の平塚古墳の築造時期を極端に繰り下げて考えることも難しい。椀貸塚古墳とは一定の時間的間隙を置きつつも7世紀前葉の中で捉えておくべきであるう。

角塚古墳では平塚古墳まで認められた、羨道と化しつつも残っていた前室構造のなごり - 羨道前部の立柱石や一段下がった天井石 - を失い、玄門部側壁(立柱)は内方に突出する形態を保つものの、玄室前壁はほとんど形骸化して玄室・羨道天井の段差もほとんど目立たなくなる。羨道幅も玄室幅程度にまで拡張されこの点でも玄室・羨道の一体化が進行している。こうした点は使用石材の大型化とともに平塚古墳より後出する要素であることは明らかである。また形態・構造上の顕著な差異は平塚古墳・角塚古墳の間にも一定の時間的間隙を推測すべきことを示唆するだろう。

その上で、既に触れた愛媛県向山古墳2号石室が角塚古墳の築造時期を推測する手がかりを与えてくれる。その基本形は角塚古墳石室によく似る。玄門部側壁の内方突出はほとんど目立たないが両側に大形の立柱状の石材を配し、羨道幅は玄室のそれにほぼ匹敵する程度に拡張している。その一方で玄室・羨道天井の段差はまだ明確に表現する。また使用石材種の違いもあろうが、向山古墳2号石室では石材の大形化は進展するものの、石材加工の度合いがやや未熟でその分石組みに粗雑さが残る。この点は同じく結晶片岩の大形材で組んだ徳島県穴不動古墳石室と対比すると明瞭だ。こうした特色から向山古墳2号石室を角塚古墳に先行するものと位置づけることが妥当であろう。既に述べたように出土須恵器から向山古墳の築造時期を7世紀前葉の幅で捉えるならば、平塚古墳との少なからぬ差異の点も考慮して、角塚古墳は7世紀中葉段階の築造と位置づけたい。

以上、煩雑な説明に終始したが、大野原4古墳の築造年代について現時点では次のように位置づけることができる。

椀貸塚古墳:6世紀後葉(~末葉) 岩倉塚古墳:6世紀後葉(~末葉)

平塚古墳:7世紀前葉角塚古墳:7世紀中葉

これまで推測されてきた各古墳の年代観と大きく異なるものではないが、椀貸塚古墳の 築造時期を母神山鑵子塚との関係からやや古く位置づけ直すこと、石室形態の点から椀貸 塚古墳・平塚古墳・角塚古墳3基の築造時期の間に若干の間隙を見積もることをあらため て強調しておきたい。

2. 椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳・岩倉塚古墳の意義

1) 椀貸塚古墳

6世紀後葉の築造が想定できる椀貸塚古墳の玄室各部は主軸長6.6m、最大幅3.6m、最大高(現状値)3.9mを計り、床面積で22.3㎡、同容積ではほぼ80mに達するきわめて巨大な玄室を内蔵する。この規模は横穴式石室墳築造の全期間を通じて四国最大規模を誇るものである。6世紀後葉は多くの地域で盟主墳の石室規模が顕著に拡大しはじめる段階であるが、四国では各地の最大規模石室はせいぜい母神山鑵子塚クラス、すなわち玄室床面積10~12㎡台に収まる。椀貸塚古墳の石室はほぼそれらに倍する傑出した規模である。多少築造年代は前後するが、近畿中枢部の横穴式石室墳と対比しても、玄室床面積の点では奈良県見瀬丸山古墳(推定30㎡+α)、同石舞台古墳(27㎡)に準じ、奈良県牧野古墳(22.4㎡)、同塚穴山古墳(21.8㎡)に匹敵する。対岸の吉備地域は畿外では例外的に巨大な横穴式石室墳が分布する。とくに巨大なコウモリ塚古墳、箭田大塚古墳は各々玄室床面積28㎡、26㎡を測り、畿内中枢部でも傑出したトップクラス石室に引けをとらない規模となる。椀貸塚古墳の玄室規模はこれらに準じるものであり、畿外諸地域の通常クラス盟主墳の石室規模から抜きん出たサイズであることに注意しておきたい。

墳丘は二次的改変が著しく、その詳細は今後の調査に拠る部分が大きいが、現状では不整円形を呈しその径は40m強、高さ6.5mとなる。墳形についてもなお確定的ではないが、現形からとりあえずは円墳と考えておきたい。一定程度墳裾部が削平されていると見られるので、本来は周濠を含めた墳域は少なくとも径50mを超えたものとなろう。葺石・埴輪を欠き、その点では墳丘外表の装飾は著しく簡略化された段階の所産であるが、内蔵する石室の外皮にとどまらない圧倒的な威圧感を誇る墳丘規模はなお墳墓の外観部分に意を注ぐ古墳の本来的属性を強調するものといえよう。この墳丘規模はもちろん該期の四国地域盟主墳の中では突出した存在である。

2) 岩倉塚古墳

前節で述べたように、残存部位から推測して岩倉塚古墳の石室は母神山鑵子塚古墳と同形同大と推測される。したがって椀貸塚古墳石室との規模的な格差は決定的である。しかしそのような特異な存在を除外すれば、この時期ではふつう地域の頂点に位置する盟主墳の石室規模といえるものである。

やはり極度の二次的改変を被っており、かつてごく小規模なトレンチ調査が試みられているものの現状で墳丘規模を推し量ることは困難である。隣接する椀貸塚古墳との関係で規模などが一定制約される可能性はあるが、同型同大の石室と見られる母神山鑵子塚古墳が径40m高さ6.5mの円墳と復元されることが一つの示唆を与える。

3) 平塚古墳

椀貸塚古墳に後続する平塚古墳は玄室下半が埋没しており、今のところ正確な各部寸法は確認できない。現状の計測値では主軸長6.3 m、同最大幅2.8 mを測る。玄室高は不明とせざるを得ないが、羨道天井との段差を考慮すれば、すでに述べたように椀貸塚古墳に比べかなり圧縮されたものであることは間違いなかろう。床面積は現状計測値で約17.5 m、実際は一回り大きくなるであろうが椀貸塚古墳玄室の8~9割弱程度の規模に

留まる。築造時期と想定される7世紀初頭~前葉に限ればではやはり四国最大規模の横穴式石室ということになる。ただしこの時期は四国各地で有力古墳の横穴式石室が最も大型化する時期にあたるので、讃岐地域に限っても坂出市醍醐2・3号墳、善通寺市大塚池古墳、さぬき市中尾古墳のように13~15㎡台の大形石室墳が知られている。また愛媛県四国中央市の向山古墳の1号石室は現在、天井石の大半を失いほぼ埋没しているため詳細は知り得ないものの、石室全長の推定値や露出部分から推測される玄室幅から、平塚古墳に匹敵する玄室規模が想定される。すでに述べたように向山古墳は平塚古墳にごく近接した時期の築造と見られるものである。したがって平塚古墳は椀貸塚古墳に引き続き、四国最大規模の石室を内蔵するものではあるが、次位クラス諸墳との規模の上での格差は明らかに縮小していて、椀貸塚古墳ほどに傑出した存在とは言い難い。

ただし墳丘規模の点ではやはり傑出した存在といえよう。墳丘の現状は大幅な改変が想定されここから旧状を窺うことは難しい。墳丘形態についてもあらためて今後の調査で確認する必要がある。とはいえ現状でも墳丘は径52m前後を呈し、御旅所の設置などで頂部の削平が予想されるものの高さ5mを測る。椀貸塚古墳の墳丘規模もなお確定的ではないが、石室規模を一定縮小するにもかかわらず、墳墓の外観部分では同程度の規模を踏襲している可能性が高い。

石室規模の点では次位クラス有力墳との較差はさほどではないが、この墳丘規模は突出したものである。

4)角塚古墳

7世紀中葉の角塚古墳は、四国地域における最終段階の大形横穴式石室墳の一つである。 全般的に横穴式石室墳の築造数は目立って減少する段階だ。この時期には直前期からこの 時期にかけて使用石材の大型化傾向は頂点に達し、玄室三壁をほぼ各一枚の巨石で構成す る石室が誕生する。しかし石室規模は縮小し始めている。

角塚古墳では玄室主軸長4.5 m、同幅2.5 m、同高2.2 mを測り、玄室床面積は11,2 mとなる。これはおよそ平塚古墳の2/3程度にすぎないが、7世紀中葉では最大規模といえる。石室形態が酷似しそこから近接した築造時期を推定できる徳島県穴不動古墳の玄室床面積は9.1 mを測る。同じく一枚石化を指向し比較的類似した形態となるが、一段階遡ると見られる愛媛県向山古墳2号石室では9.8 mとなる。

そうすると引き続き角塚古墳においても同時期では四国最大の石室規模となるわけであるが、この段階では同格の盟主墳がほぼ旧国毎に存在しており、石室規模の点ではそうした最有力墳グループの一基という位置づけになろう。

この場合も墳丘規模は重要だ。なお椀貸塚古墳・平塚古墳と同程度かこれらに準じた規模を保っている。今のところ辺45m×36m、高さ7m程度の方墳と復元され周濠を伴う。墳丘規模の点では同時期の有力諸墳との格差は巨大だ。

3. まとめ

以上、述べてきたように大野原台地に所在する4基の大形横穴式石室墳は6世紀末葉から7世紀中葉にかけて継起的に築かれたもので、築造時期差などから3世代にわたるものとみられる。このうち椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳は歴代、四国地域で最大規模の石室を内蔵し、墳丘規模の点でも他を圧倒する。とくに椀貸塚古墳の玄室規模は、畿内地域の最有力墳石室に準じたものである。

こうした傑出した内容の大形墳が3世代にわたり、一所に築造され続ける現象は古墳時代後期にあっては希有なものである。四国地域はもちろん列島全域を見渡しても類例は乏しいと思われる。

また先に母神山鑵子塚古墳石室が椀貸塚古墳石室の直接のモデルであることに触れた。 そしてそれが以後、讃岐地域の有力墳石室の基本形を形作るものであることを指摘したが、 石室形態の点から見て、讃岐諸地域の有力墳でこの石室形態が採用されるに際しては椀貸 塚古墳の果たして意義が大きいだろう。母神山鑵子塚古墳の石室形態は、椀貸塚古墳を媒 介に讃岐各所に波及すると見られるからである。

また平塚古墳・角塚古墳の場合にも同様の事態が想定される。前者では伊予・住吉古墳や土佐・朝倉古墳、後者では阿波・穴不動古墳、伊予・向山古墳2号石室といった各地の盟主墳の石室形態に通底する要素が少なくない。この点はなお詳細な検討を要するものであるが、傑出した墳丘・石室規模と共に椀貸塚古墳以下の大野原台地の大形横穴式石室墳の意義を考察する点では看過することができないものである。

大野原古墳群の特色とその意義 ~後期古墳の中での位置づけから~

菱田 哲郎

1. はじめに

大野原古墳群は椀貸塚古墳をはじめ規模の大きな横穴式石室を内包し、同時期では傑出した存在の古墳が継続的に築かれる古墳群として注目されてきた。今回の委員会の設置により、石室の保存と活用について検討が加えられることになったが、ここではその重要性について、後期古墳群の中での位置づけをはかりつつ考えることにしたい。

2. 古墳時代後期の首長墓

古墳時代後期に普及する横穴式石室は、その規模が階層性を表示していると一般的に考えられている。飛鳥にある見瀬(五条野)丸山古墳、石舞台古墳など、王家や有力貴族層の巨大な石室を頂点とし、群集墳の中の小さな石室にいたるまで、さまざまな規模のものが存在している。これは各地でも同様な状況がみとめられ、大型横穴式石室を抽出していく作業から、在地の有力者をあぶり出すことができ、地域社会の中での階層構成を考える材料となっている。そういう意味では「地域の紳士録」としての役割が後期古墳にあったということができる。

横穴式石室の規模は、時期による変化もあるけれども、600年前後のものを中心に見ると、各地の事例では、全長では10m、玄室長では5m、幅では2.5mを超えるものが、地域の有力者の墓として抽出できる。とりわけ、石室幅は、天井石の大きさを規定することとなるので、幅広い石室を築くには多大な労力を必要とし、見た目以上の格差を考えなければならない。そして、抽出された大型横穴式石室の分布を検討していくと、律令制下の郡域で1から数カ所程度の密度で分布する場合が多く、のちの郡領層につながる人々を被葬者として想定することが可能である。したがって、律令社会の成立過程や、それにともなう国郡里という地域区分の明確化を明らかにするためにも、後期古墳の評価が不可欠と言える。(なお、吉備の場合のように、さらに規模の大きな石室が国ごとに1ヵ所程度存在する場合もあるが、そのクラスの横穴式石室を持たない地域も多い。)

3. 大野原古墳群の規模と特徴

大野原古墳群の規模について、最新の測量成果をもとに検討してみたい。数値は以下の通りである。(次頁表を参照)

それぞれの古墳の年代については、椀貸塚古墳が6世紀後葉、平塚古墳が7世紀初め、 角塚古墳が7世紀第2四半期におおよそ位置づけられると考えている。角塚古墳の規模が やや小さいのもこの年代差によるものと推測できる。そして、先ほどの基準に照らし合わ せても、地域を代表する勢力の墓として理解することができる。時期的にも角塚古墳が立 評の直前にあたっており、讃岐国苅田郡の郡領層になる有力氏族の奥津城であると想像される。

さて、石室の規模だけでなく、構造にも目を転じると、この3基の古墳においても違い が顕著であり、その変化の過程を観察することが可能になる。椀貸塚古墳は前室を持つ複

椀貸塚・平塚・角塚古墳石室計測データ

(単位:m)

								(単位:m)
杨	資塚古墳			平塚古墳		1	角塚 古墳	
石室長			右側壁	左側壁	-	右側壁	∞左側壁	
石室全長	12.10	現存長(羨道未確認)	13.06	12.43	"	9.70	10.15	
(前室袖石長)	0.72				(羨道長)			(羨道長)
(前室長)	3.49		5.83	5.53		4.22	4.65	
(玄門袖石長)	1.09		0.85	0.97		0.80	1.16	
(玄室長)	6.80		6.38	5.93		4.68	4.34	
石室幅								
奥壁部	3.45			2.68			2.40	
玄室中央部	3.58			2.87			2.58	
玄室玄門部	3.12			2.90			2.54	
玄室最大幅	3.64			2.96				
玄門部	1.28			1.78	(羨道玄門側)		(羨道玄門部)	
前室玄門側	2.44			2.47	(羨道中央部)		(羨道中央部)	
前室中央部	2.37			2.47	(石室開口部)		(石室開口部)	
前室袖石側	計測不能			2.28				
前室袖石部	1.11							
石室高			右側壁	左側壁		右側壁	左側壁	
奥壁部	3.77	推定	2.42	2.26		2.42	2.36	
玄室中央部	3.86		2.55	2.50		2.20	2.19	
玄室玄門部	2.77		2.58	2.51		2.27	2.38	
最大高	3.86		2.58	2.51		2.42	2.38	
玄門部	1.55		1.53	1.54	(羨道玄門側)	1.82	1.76	(羨道玄門側)
前室玄門側	2.15		2.11	2.18	(羨道中央部)	1.77	1.73	(羨道中央部)
前室中央部	1.92		1.69	1.78	(石室開口部)	1.76	1.83	(石室開口部)
前室袖石側	1.71		0.80	1.22	,	1.08	1.14	
前室袖石部	0.77							

※石室内床面未検出、石室内へ土砂流入や石室開口部の破壊等により、計測数値は現状の数値である。

(2009.03.31 現在)

室構造を取っており、どちらかというと北部九州の影響が看取される。玄室も胴張り気味で、天井も高く壁面の内傾も著しい。それが平塚古墳になると袖の張り出しは維持されるが、前室としての空間は取られず、羨道に化していることがまずあげられる。壁面を構成する石材も、椀貸塚古墳よりも平滑になっている。そして、角塚古墳では、袖の張り出しがわずかになり、畿内の両袖式横穴式石室とほぼ同じ平面形を取るようになる。壁面の平滑化も進み、全体に構成する石材が大型化している。平塚古墳から角塚古墳への変化として玄室の前壁が高さを大きく減じることがあげられるが、この変化も7世紀前半における畿内の横穴式石室の変化と一致している。

以上でみてきたように、椀貸塚古墳から平塚古墳、角塚古墳への変化は、一連の連続性をみとめることができるとともに、次第に北部九州的な要素が失われて、畿内的な要素が強くなっていく状況が看取できる。長方形の石室に羨道がとりつく畿内の横穴式石室は、石材の大型化や壁面の平滑化が進んでいくことが一つの特徴であるが、この変遷は同時期の多くの地域で同時に起こっており、そのような流れに沿うものとして大野原古墳群の横穴式石室の変化を理解することができよう。

大型の横穴式石室の変化を三代にわたって子細に観察できる点で、大野原古墳群は貴重な位置を占めていると言える。石室の構造変化が文化現象なのか政治的背景を持つものなのかは議論が分かれているが、そのような議論にとって、大野原古墳群のような歴代首長墓が良好に保存されている事例は重要な意義を持つだろう。

4. 保存と活用をめぐって

上述したように、大野原古墳群の重要性は、大型横穴式石室の変遷を観察できる点にあるが、墳丘もよく残されていることから、調査の進み方によっては、さまざまな検討に耐える資料を提供してくれることが期待できる。大型横穴式石室の変遷は地域社会を構成する最上位の変遷を明らかにするという意味を持つことから、この周辺の集落遺跡などの調査の進展によっては、律令成立前夜の地域社会の状況を雄弁に物語る材料となろう。

現状では残念ながら石室内部を自由に見学することはできず、入口から内部をうかがうのが関の山である。先にも触れたように、石室の形態や石材の構成、天井の架構方法など、内部で観察できる情報はたいへん多く、考古学に関心のある人ばかりでなく、一般の人にとっても、大きさを実感する上で内部の見学は有意義なものと考えられる。石材の挙動など、保存をめぐる課題を解決することが先決ではあるが、安全を確保した上で、内部の見学が可能になるように対処することが望ましい。

3基の古墳の中では、角塚古墳が最も活用しやすく、現状ではそのまま見学できるようにしても問題が少ないと考える。ただし、角塚古墳は天井が低くなっており、石室の巨大さを実感するためには、平塚古墳が次の候補となろう。安全性の問題を考えると、時期を限った公開にならざるを得ないと考えるが、年に2回でもそのような機会を持つことが望まれる。そして、椀貸塚古墳は、複雑な石室の形状、構造を取り、横穴式石室の研究にとっては、実際に内部で観察できることが望ましいが、一般への公開については三墳の中では最も難しい状態である。研究者への対応は教育委員会がおこなうとして、一般には内部公開はおこなわず、代わりに案内板などのガイダンスをきっちりおこなうことが重要であろう。石室の模型などを併用できればなお望ましい。神社の了解が得られれば、年に1、2回程度、石室の入口から内部をのぞくような公開の手段も検討してもよいだろう。

7月に本学の学生とともに見学をおこない、そののちに感想を聞いてみた。その結果、 椀貸塚古墳の場合は、入れなくても案内板で内部がわかるとよいといった意見があり、ま た平塚古墳は、内部に入ることによる感動が大きかったとの感想があった。そして、4基 の古墳を順に見てまわったことにより、より立体的に石室の変化が理解できたという感想 もあった。文化財に対する関心の違いも考慮しなければならないが、せっかく時期の異な る複数の古墳があり、そのうち平塚古墳と角塚古墳は何とか入れる状況にあることを考え ると、これらをあわせて理解できるような仕組みを作ることが必要であろう。

上述したように、大野原古墳群の重要性は、単体でも十分に価値をもつ大型横穴式石室が3基あり、しかも連続的な変遷をたどれることにある。活用にあたっては、このような特性を最大限用いて、3古墳の有機的な連携をはかっていくことが重要である。したがって、岩倉塚古墳も含めた大野原古墳群の解説をおこなうガイダンス施設(看板でも可)、古墳を巡るルートの明示、そして、特定の公開日を設けて案内をおこなうといったイベントの開催など、大野原古墳群全体での取り組みが求められている。

活用に先んじて、重要な調査が必要であることは論を俟たない。実際、今回の横穴式石室の測量を通して、より正確にこれらの古墳の評価が可能になっている。一方、墳丘については、まだ未確定の部分も多く、平塚古墳については現状をそのまま墳丘として認めることはできない。岩倉塚古墳についても同様である。後期古墳では墳丘の覆土が流出する場合が多いが、椀貸塚古墳は墳丘がきわめて高いので、墳丘頂部がよく残されている可能性がある。平塚古墳も墳丘は改変を受けていると考えられるが、盛土の下にオリジナルの墳丘が残されている可能性も高い。発掘調査による墳丘の確認は、今後の活用にとって一つの課題になると考える。

大野原古墳群は、神社も含めて心地よい景観の一部を形成している。したがって、古墳時代の景観を復原するというのではなく、現在の景観に含まれる江戸時代以降の文化遺産も包摂しながら、歴史を感じ取れる地域として取り扱っていくことが望まれよう。そして、角塚古墳の周辺は公園として利用されており、この場所に大野原古墳群のガイダンス施設を設けることはそれほど難しいことではないと考える。現状をうまく利用するし、また現在の景観の保全もはかりながら、地域の文化遺産として大野原古墳群の保存と活用が進められることを願ってやまない。

観音寺市の文化財保護行政と大野原古墳群の現状と課題

守谷 貞和

大野原八幡神社の境内から中央公園にかけての地域は、6世紀後半から7世紀前半にかけて築造されたといわれる椀貸塚・平塚・角塚の三大古墳が点在する。これらの古墳群はその築造時期や規模からみて県内でも屈指のものとして、昭和28年9月10日に香川県の文化財として史跡指定されている。

これらの三基の古墳はいずれも町の中心部にあるため、古くから多くの人々に親しまれてきた。なかでも椀貸塚古墳は、小学校に隣接する八幡神社の境内にあるため、多くの人々の子供時代の想い出の地として、今も心の中に生き続けている。また、八幡神社の創建以来、その御旅所として活用されてきた平塚古墳は、毎年の秋の例大祭には墳丘頂部が神事の場となって三台の御輿が出御する。神事の後は豊栄の舞や浦安の舞の奉納とともに、壇尻や太鼓台の奉納もあり、中央公園とともに多くの人々の集まる賑わいの場となっている。

このような住民との結びつきとは別に、これらの古墳群はその築造された時期や規模の大きさからみて、県内はもとより全国クラスの巨石墳といわれ、その道の専門家の間では極めて高い評価を受けている。しかし、こういった評価とは裏腹に地域の住民にとっては、単に年中行事や少年時代の想い出の地としての存在でしかなく、学術的な面についての認識は必ずしも十分なものとはいえない。

その理由の一つとして考えられることは、旧大野原町の時代は文化財についての専門的な知識を持つ職員がおらず、一般の職員が交替で文化財行政を担当していたので、これらの古墳等の調査も十分に行われず、ただ現状を維持する程度のものであった。そのために住民たちの間にも貴重な文化財としての認識が少なく、必要な管理や調査についての取り組みも十分なものではなかった。

しかし、平成の大合併によって新観音寺市となり、初めて専門の職員を有することとなり、三大古墳の保存や活用についての検討委員会が正式に設置されることとなった。そして、これまでに計三回の委員会が開催され、大学の先生や専門家の方々から貴重なご意見やご提言をいただいた。それらを要約すると、これらの三大古墳は国指定の文化財として大切に保存していく価値を持つものであり、今後、是非その方向での取り組みをお願いしたいとのことであった。提言をもとに古墳の性格や規模等の現状を正確に把握するため、墳丘の測量や石室の実測等を行い詳細な資料を得ることができた。このことについては、大野原八幡神社をはじめご指導ご協力いただいた多くの皆様にお礼を申し上げておきたい。

最後に、観音寺市の文化財保護行政について少しばかり苦言を呈しておきたい。今後の文化財保護行政及び大野原三大古墳の保存・活用を考える時、その中心的役割を果たす文化財担当職員は合併後も増員されておらず、現在の職員一人体制では著しく過重な負担となっていることは誰の目から見ても疑いのない事実であり、文化財に関心を持つ多くの市民がその状況を危惧しているところでもある。さらに、市の面積や指定文化財の件数等からみても、県内他市町の文化財担当者に比して多くの業務量があることも明白な事実である。この際、新しく文化財専門職員を増員し、文化財保護行政の業務の充実を図る体制の確立が急務であり最重要課題であると考える。市の財政状況が極めて厳しいものであることは十分承知しているが、専門職員の過重な業務量を解消するとともに、安全面の確保や蓄積された技術の伝承を図るためにも必要不可欠なことであると確信する。

大野原古墳群の公開・活用方法について

横山 照美

今回の検討委員会に参加して香川県指定史跡「椀貸塚、角塚及び平塚」の持つ歴史的・学術的価値を再認識させられることになった。検討委員会の開催と並行して実施された各古墳の基礎調査結果については、これまで略測図程度のものでしかなかったものが、しっかりとした基礎データが新たに加えられたことは大きな成果であったと思われる。この古墳が所在する地域に居住する我々市民は、この貴重な文化財を私たちの子孫へと守り伝える使命がある。そのためにはより多くの市民にあらゆる機会を捉えて伝え、語りかけるなどの行動を継続的に行っていかなければならない。

以下に公開・活用方法についていくつかの方法を提案してみたい。

- ① 検討委員会において意見が出されているように学術的価値が充分認められているので、文化庁へ申請を行い観音寺市初の国指定史跡にしていくことが、今後の保存や公開・活用に向けて最良の手段であると思われる。
- ② 史跡整備に際しては案内板の設置や説明板の改修、内部公開のための照明施設等の設置など、見学者の利便に供するような施設整備を図る必要がある。
- ③ 見学者の安全確保のため、椀貸塚、平塚に設置されている支保工の更新や部分補強が必要である。また、平塚については雨水が石室内に侵入しているためそのための防水対策も必要である。
- ④ 公開については、他市においても取組があるように、年に1回程度は一般公開日を 設けるべきである。これについては観音寺市内だけでなく同様な巨石墳が所在する四 国中央市等と広域的な連携をして公開事業を実施するのも有効な方法であると考える。
- ⑤ ④の公開事業に関連し、毎年定期的な見学会や説明会を開催するなどの普及啓発活動を継続的に実施すべきである。ガイドブックや啓発用パンフレットの作成はいうまでもなく、市役所ホームページなども内容の充実を図る必要がある。
 - 小・中学校についてはふるさとの価値ある文化財を体感する機会を創出することが 重要であり、また、大学等の研究者を招いてのシンポジウム等の開催も有効な手段で あると考える。
- ⑥ 文化財を長期的に守り伝えていくためには、行政の文化財担当部局だけでは充分ではなく、市役所全体と市民が密接に連携した日常的活動が必要であると考える。これには市民の意識の変革が何よりも大切ではないだろうか。たとえば文化財の見学者に対して説明を行う文化財ボランティアガイドの育成はその第一歩ではないだろうか。

以上、これ以外にも良い方策があるのではないかと思われるが、現在のところの考えを まとめてみた。

大野原古墳群の整備

高瀬 要一

椀貸塚古墳・角塚古墳・平塚古墳の整備計画を考えるためには、本古墳群が置かれている現状と抱えている課題を整理する必要がある。これらの課題を解決、あるいは是正することが将来的な保存と活用につながる。すなわち整備計画ということになる。

以下、本古墳群に共通する全体的な問題と個々の古墳に分けてそれぞれの課題を記す。

全体的な課題

本古墳群の価値・歴史的意義を積極的に発信し、地域文化・歴史的環境の核として市民の地域に対する誇りを育てていくことが重要である。すなわち、全国的に見ても巨大な石室を持つ古墳群であること、大野原が四国における古墳時代の一中心地であったことを示していること、当時の文化・歴史的背景などを三古墳の整備とともに市民に伝えていく必要がある。このためには古墳群の近くに資料館の設置が望まれる。

三古墳以外の古墳を含めて古墳群を連絡する見学路、道標、説明板、パンフレットなども整備したい。見学路整備は、新たに専用の歩道を設けるということではなく、ルート上にある既存の歩道の舗装を専用の仕様に変えることや、統一されたデザインの道標の設置などである。

巨大な石室であることを実感してもらうには、石室に入ることが最善である。ただし、公開ということになれば見学者の安全確保が大前提であることも言を俟たない。当面、石室内部まで入れるのがむずかしいのであれば、入口から石室を見学する施設の整備が必要となる。このときに内部が見て取れる照明が欲しい。

三古墳の墳丘の広がりや周濠の有無については現状では調査データがなく、不明である。 今後の発掘調査でこれらの成果が得られれば、可能な部分での復原的な整備、あるいは平 面的な表示を行うことや、本来の形状を説明板で解説する必要がある。

墳丘上に生育している樹木については、封土の流亡を防ぐ役割とランドマークとしての 効用の二つのプラス面がある (写真 1)。一方、樹根による石室に対する悪影響や墳丘の形状を見えにくくするマイナス面がある (写真 2)。石室に影響している樹木は伐採するよりないが、墳丘形状を見えにくくしている樹木は下枝を整理することで改善できる。

古墳群がある場所は大野原町の中心部に近く市民が足を運ぶのには便利なのであるが、 反面、市街化が進み、歴史的環境・景観は阻害されつつある。市の土地利用計画や景観計 画に古墳群を重要な要素と位置づけて、計画を策定する必要がある。



写真1



写真 2

椀貸塚古墳

大野原八幡神社の本殿背後にある円墳である。本殿を建てる際に墳丘南辺部を削平し、削られた法面を石積で土留めしている。この時に石室の羨道部も先端部が破壊され、現状は石積面に羨道部が開口するという特異なあり方を示している(写真 3)。本殿と石積面との間が狭く、本殿を囲む玉垣を墳丘にあてて本殿と羨道部前面間の通路を閉鎖している(写真 4)。また本殿周囲の地面は羨道床面よりも 50cm 高い。したがって、開口部から羨道に入るには小さな口から羨道床面に下る形となり、簡単に入ることはできない(写真 5)。通常は玉垣で閉鎖されていることと、開口部の状況から、一般の見学者を受け入れることがむずかしい現状である。

こういう現状ではあるが石室の公開をどうするのかが問題である。限定的な公開とせざるを得ないと思うが、玉垣部に石室公開のための入口を設けることや、羨道開口部を入り易く改善することなどが課題であろう。石室を公開する場合は、羨道部や石室の安全性を確保することが必要である。

もう一点は雨水が開口部から石室内に入らないよう措置することである。開口部周囲の 地面を外側に向かって低くすることや、場合によっては周囲に排水溝を設ける必要もあろ う。



写真3



写盲 4



写真5



写真6

角塚古墳

角塚は、東側が共同墓地となっており、この墓地造成のために墳丘東辺部が削平され、石積で土留めされている (写真 6)。特に東北部にある焼却炉は墳丘を壊しているだけではなく、景観的にも大きなマイナス要因となっている (写真 7)。墳丘から離れた場所への移設

もしくは廃止を検討すべきであろう。これが叶えば封土を復原的に整備し、墳丘を保護することができる。





写真7

写真8

角塚の南側は大野原中央公園と接している。また、同公園を挟んだ南側には平塚がある。 しかし、この公園計画には角塚や平塚のことはほとんど考慮されていない。本公園が両古 墳のジョイントの役目も果たしているのであるから、両古墳をつなぐ見学園路としての機 能や、公園内からの両古墳への美しいビスタを形成する配慮が欲しい。また、歴史的景観 とはほど遠いデザインの公園施設の改善も望まれる(写真8)。公共施設が自ら範を示さな いことには、民間の施設や住宅などのデザインコントロールは理解を得ることができない。

角塚の南側は墳丘や周濠の復原も可能であるし、石室の公開についても支障なくできる。 三古墳のなかで復原的な整備に支障がないのは、現状ではここだけであるから是非検討していただきたい(写真 9)。

墳丘上の樹木ではシュロが何本か繁茂しているのが気になる (写真 10)。伐採すべきであろう。



写真9



写真 10

平塚古墳

平塚での問題は、墳丘上で行われる祭りに伴う神輿台の設置やのぼり道整備によって封 土の削平や形状の変化がある (写真 11)。頂上部の封土が薄くなったことが一つの要因となり、 石室への水の浸入が見られる。簡便な対策としては石室の上部に防水シートを敷く方法が ある。また、薄い封土上に生えた樹木の根による石室石組の破壊も懸念される。石室直上 の樹は伐採すべきであろう。

また、祭りのために作られた平場やその土留め石積については、本来の墳丘を理解する上で大きな障害となっている (写真 12)。祭りとの調整が必要であるが、古墳の保護・活用と両立できるあり方を検討していただきたい。

墳丘裾部の現状はなだらかに周囲の道路に接しており、このために墳丘内への車の乗入れ・駐車が多い(写真 13)。墳丘の範囲を確認し、裾部を表現することにより、墳丘の明示と車の進入を制限するべきである。

以上が気になった問題点・課題である。すぐにできることと長期的に取り組むべき課題があると思う。現状では宝のもの腐れである。これだけの歴史遺産を町づくりに活かせていない。文化財、教育委員会の垣根を越えた市としての総合的な取り組みが求められる。



写真 11



写真 12



写真 13

ふりがな	かがわけんして	 ていしせきわんか!		よびひらづかこふ		うけんとういいん	 かいほうこくしょ	(べっさつ)						
書 名	かがわけんしていしせきわんかしづか、かくづかおよびひらづかこふんほぞん・かつようけんとういいんかいほうこくしょ(べっさつ) 香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書(別冊)													
副書名	日四小祖代入州 成县 小													
巻次														
シリーズ名														
シリーズ番号														
編著者名	観音寺市	教育部 生	 上涯学習課	文化振興	係長 久保	 								
編集機関	観音寺市	教育委員会	<u> </u>		<u> </u>									
所 在 地	₹768-8		県観音寺	 市坂本町-	·丁目 1 番	1号 TEL	0875-23	-3943						
発行年月日	西暦 20	西曆 2010 年 (平成 22 年) 3月 31日												
ふりがな	ふりがな													
所 収 遺 跡	所在地	市町村	遺跡番号	0 / , //	0 / //		m²							
わんかしづかこふん 椀貸塚古墳	かがわけんかんおんじし 香川県観音寺市 おおのは55ょうおおのは5 大野原町大野原 1913番地 1	37205		34度 05分 16秒	133 度 39 分 48 秒	20070219 ~ 20070831	7,585 (地番面積)							
ひらづかこふん 平 塚 古 墳	かがけんかんおんじし 香川県観音寺市 おおのはちょうおおのはち 大野原町大野原 1533番地ほか	37205		34度 05分 00秒	133度 39分 34秒	20070217 ~ 20080424	4,088	観音寺市埋蔵 文化財保存整備事業						
かくづかこふん 角 塚 古 墳	かがわけんかんおんじし 香川県観音寺市 おおのはちょうおおのはち 大野原町大野原 1681番地1ほか	37205		34度 05分 05秒 (WGS84系)	133度 39分 37秒 (WGS84系)	20080522 ~ 20080911	1,284 (地番面積)							
所収遺跡名	種 別	おもな時代	おもな	遺構	おもな遺物	特	記事	 項						
椀貸塚古墳	古墳	古 墳 (6世紀後葉)	古 墳	1 基		 ・円墳(直径約36m) ・横穴式石室(複室構造) ・石室全長12.10m(現存長) ・石室奥壁幅3.45m 石室最大高3.86m(現況) 								
平塚古墳	古墳	古 墳(7世紀初)	古墳	1 基		・円墳(直径約 52m) ・横穴式石室 ・石室全長 13.06m(現存長) ・石室奥壁幅 2.68m 石室最大高 2.58m(現況)								
角塚古墳	古墳	古 墳(7世第二四半期)	古墳	1 基		・方墳?(一辺 43m) ・横穴式石室 ・石室全長 10.15m(現存長) ・石室奥壁幅 2.40m 石室最大高 2.42m(現況)								

香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳 保存・活用検討委員会報告書 (別冊)

2010 (平成 22) 年 3 月 31 日発行

編集・発行 観音寺市教育委員会 〒768-8601 香川県観音寺市坂本町一丁目1番1号 TEL(0875)23-3943 FAX(0875)23-3965 印 刷 石川印刷興業株式会社

